



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

## 歴史と数字が出会うこと

著者	高島 正憲
雑誌名	エコノフォーラム
号	26
ページ	75-75
発行年	2020-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00028473">http://hdl.handle.net/10236/00028473</a>

2019年  
11月26日  
火曜日

高島 正憲 専任講師（経済史）

# 歴史と数字が出会う瞬間

僕の経済学部における研究の専門分野は「経済史」となっている。経済史とは、過去にあった経済事象にかんする記述を対象としたもの、つまり歴史資料に「書かれた」経済そのものを研究すること、というイメージが一般的だろう。僕の研究もそうした学問体系に分類され、実際そうしたこともしているが、最近

は、資料に「書かれていない」数字を推計して歴史を数量的に描くようなことに取り組んでいる。

推計とは、その名の通り推定して計算することである。具体的には、歴史のある時代における1人あたりの所得や日本全国の人口など、現代でいうところの経済指標について、歴史資料をもちいて何らかの統計的加工をほどこして算出することによって、歴史上の経済的実態を叙述する方法である。推計に必要な資料は不完全なものが多いため、時に

は大胆な歴史的仮説・仮定を設定して計算することもある。

つまり、歴史を叙述するといっても、その方法は資料に書かれた内容そのものから歴史を語るという作業ではなく、資料に書かれていないことや資料からでは分からないことを、歴史学以外のいろいろな方法を——それは主に経済学・統計学での手法であるが——を駆使して「歴史的事実」に可能な限り近づこうとする作業といってもよいだろう。

このような歴史を経済統計の手法で測るという研究は、世界経済2000年の歴史について各国GDPを推計したアンガス・マディソンの研究が有名であるが、その起源は17世紀の英国でおこった政治算術派（Political Arithmetic）にはじまる。その創始者の1人であるウィリアム・ペティは、その特徴を以下のようにのべている。

「私は、比較級や最上級のことばのみを用いたり、思弁的な議論をするかわりに（中略）自分の言わんとするところを数「number」・重さ「weight」または尺度「measure」を用いて表現し、感覚にうったえる議論のみを用い、自然のなかに実現しうる基礎をもつような諸原因のみを考察するという手づきをとったからで、個々人のうつり気・意見・このみ・激情に左右されるような諸原因は、これを他の人たちが考察するのみまかせておくのである」

要するに、具体的な数・重量・尺度という指標によって物事を分析することが重要であるということである。いうまでもなく、これは経済学の基本中の基本の考え方である。そう考えると、やや異端の歴史学にもみえる「数量をもって」歴史を叙述するという研究も、実はけっこう王道のアプローチなのかもしれない。

ところで、ペティが強調した「数・重さ・尺度」であるが、これは『旧約聖書外典』（アポクリファ・聖書の正典に加えられなかった文書）の一つである「ソロモンの知恵」第11章第20句にある一節「なんじはよろずのものを、量と数と重さにて定めたまえり」をヒントにしたものと考えられている。同様の表現はペティの他の著書にも登場する。この神が数・重量・尺度をもつて考えることを人間社会に示したという聖典からの引用は、経済学がまだ生まれなばかりの頃に、具体的な数量をもつてこそ世の中のしくみが説明できるとしたペティが、その考えをユニークなたちであらわしたもののなのだろう。

\*ペティ著、大内兵衛・松川七郎翻訳（1955）『政治算術』岩波文庫（原著1690年）。